様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月８日現在

機関番号：１４２０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８～２０１０
課題番号：２０５２０２２５
研究課題名（和文）　日本学者Ｆ．Ｖ．ディキンズ研究ー書簡公刊および日本研究における位置づけー
研究課題名（英文）　A study of F.V. Dickins' letters to M. Satow , Kumagusu Minakata and others
研究代表者
岩上　はる子（IWAKAMI HARUKO）
滋賀大学・教育学部・教授
研究者番号：４０１８４８５８

研究成果の概要（和文）：
イギリスにおける日本研究のパイオニアの一人として位置づけられる F. V.ディキンズがアーネスト・サトウ、南方熊楠、その他に宛てた書簡全 135 通を翻刻し、詳細な注と日本語訳をつけた書簡集を刊行した。1896 年から 1920 年にわたる書簡の検証によって、共に日本研究を切磋琢磨しあったサトウとの交流、日本文学の翻訳において多大な貢献を得た南方熊楠との関係を明らかにすると共に、ディキンズの日本観の変容をたどることができた。

研究成果の概要（英文）：
I completed the project of publishing the letters by Frederick Victor Dickins to Earnest Mason Satow, Kumagus Minakata, and other correspondents. I included correct decipherment, annotation and Japanese translation of a total of 135 letters written during the periods between 1896 and 1920. I traced the process of the changing views of Dickins from his early infatuation to bitter disappointment in his later years. I examined his friendship with Satow who had shared similar interest into all things Japanese. I also explored Dickins' relationship with Kumagusu who made a great contribution to his translation of Japanese classics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究代表者の専門分野：英米文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：日本研究、来日西洋人、ディキンズ、サトウ、熊楠

１．研究開始当初の背景

明治初期の日本で外交官としての勤務の傍ら日本研究を行ったアーネスト・サトウやジョージ・アストン、外国人教師として招聘された B.H.チェンバレンやラフカディオ・ハーンについては、日本では多くの研究がなされ一定の評価がされている。

ところが、F.V.ディキンズについてはほとんど注目されることがなかった。その名が知られたのは、駐日公使ハリー・パークスの伝記（*The Life of Harry Parkes*, 1894）の日本編の著者としてであった。東洋文庫に収めら

れた同書の翻訳（1984）にディキンズの伝記紹介がわずかに成されている程度である。その後、川村ハツエ『F.V.ディキンズ―日本文学英訳の先駆者―』（七月堂、1997）によって、ディキンズの日本文学英訳がようやく知られるようになった。

ディキンズは『百人一首』を最初に英訳したほか、数々の日本古典文学の翻訳を行うなど、日本研究の草分け的存在であったにもかかわらず、母国イギリスにおいてすら埋もれた存在であった。ロンドン大学の日本講座の初代教授に就任したフランク・ダニエルが、就任記念講演（1963）において日本研究の歩みを紹介した際に、サトウ、アストン、チェンバレンに続いてディキンズの名を挙げたのが最初と思われる。

ディキンズの業績の全体像が知られるようになったのは、著作集（*Collected Works of F.V.Dickins,* 7 vols. Edition Synapse, 1999）が出版されてからである。同書に寄せられたピーター・コーニッキの序文が現在までのところ最も信頼のできるディキンズの伝記紹介となっている。この著作集にはディキンズによる日本文学の翻訳、論文、書評、紀行文などが収められ、ディキンズ研究に欠くことのできない基礎資料となっている。しかしながら、資料は整備されたものの、それらを丹念にあたって、ディキンズの日本研究がいかなるものであったのか、イギリスにおける日本研究の成立にディキンズがどのような貢献を果たしたのか、またその研究はどのように評価されるべきかなどの点についての研究は見あたらない。

もう一つの一次資料として整備が待たれているのがディキンズによる書簡群である。ディキンズは日本にほぼ同時期に来日したサトウと長らく交友関係をもち、ふたりの間で交わされた書簡がイギリス公文書館のサトウ文書（PRO 30/33/11/4）に収録されている。そこに含まれるディキンズによるサトウ宛書簡 72 通はいまだ翻刻されていない。またディキンズが帰国後にロンドンで知遇を得た南方熊楠に宛てた書簡 51 通についても、南方熊楠顕彰館他に所蔵されたまま翻刻が行われていない。他にも未発見のディキンズによる書簡がある可能性もあり、これらを調査し、翻刻・公刊することによって、ディキンズ研究の基礎資料を充実することが当面の課題となっている。

ディキンズの書簡は公刊を意識したものではなかったために、極めて率直な意見が述べられている。サトウとの半世紀にわたる交友関係のなかで、ふたりがどのような日本観を共有しあったのか、ディキンズの日本文学の翻訳において南方熊楠はどのような役割を果たしたのかなど、書簡の解読によって明らかになってくる点は多いはずである。すでに公刊されたサトウによるディキンズ宛書簡 *Sir Earnest Satow's Private Letters to W.G.Aston and F.V.Dickins* (ed.,Ian Ruxton Lulu Press, 2008)との照合により、明らかになってくる部分も多いと思われるが、こうした研究もまだ行われていない。

２．研究の目的

本研究の目的は、これまで埋もれていた日本学者ディキンズの書簡の翻刻と日本研究の精査を行うことによって、ディキンズの全体像を明らかにするとともに、西洋の知性が日本をどのように眼差していたかを考察することにある。

ディキンズはアストンやチェンバレンよりも早く『竹取物語』『方丈記』『万葉集』などの古典文学の翻訳と研究を手がけ、日本研究の成立に大きな貢献を果たしていた。「日本を研究に値する国と認め、西洋の学問の地平に加えられるべきであると確信した先駆的な学者」として、ディキンズをサトウやアストン、チェンバレンなどと並んで初期のジャパノロジストとして位置づけることは、イギリスにおける日本研究の成立を語る上で欠かせない作業といえる。

ディキンズ著作集を概観すると、その研究は広範囲にわたり、日本語研究や古典文学の翻訳に留まらず、植物学や博物学にまで及んでいたことがわかる。たとえばサトウの『明治日本旅行案内』（第二版）の植物解説を担当したのはディキンズであり、赴任して間もない英国駐日公使パークスの函館探検に同行し、アイヌ民族に対して博物学の視点から観察を行っている。ディキンズは日本研究の可能性を多方面にわたって探っていたことがわかる。1860 年代、70 年代の横浜居留地を舞台に活発に行動し、日本の文学だけでなく、文化・自然・歴史・政治に対して強い好奇心を示し、日本を鋭く観察したディキンズは、それらの研究成果を『ネイチャー』や『アジア協会会報』に発表した。イギリスに帰国した後も、ロンドン大学事務局長の本業の傍ら、ほぼ生涯にわたって続けられた日本研究は、晩年に『古代中世日本文学』（*Primitive and Mediaeval Japanese Texts*, 2 vols, Oxford: Clarendon, 1906）として結実する。

幕末の日本にいち早く上陸しその歴史文化と文学に魅せられ日本研究にのめりこんだディキンズが、晩年にいたると変わりゆく近代日本への幻滅を口にし、ほぼ半生をかけた日本研究に対して懐疑的な発言をくり返すようになる。その軌跡は何を物語っているのか。ディキンズの日本研究の概要を把握すると共に、書簡を丹念に解読することによってディキンズの日本観の変容をたどり、日本と西洋の出会いという大きな文脈のなかでのディキンズの位置づけを考える手掛りを

えたい。

３．研究の方法

ディキンズ書簡の刊行に向けては、まず書簡の蒐集から始めた。書簡の主体となるサトウ宛および熊楠宛書簡については以下の所蔵館において入手した。サトウ宛書簡はイギリス公文書館（PRO 30/33/11/4）にて 72 通をデジタルカメラで撮影し、映像資料とした。熊楠宛書簡は和歌山県田辺市の南方熊楠顕彰館において 49 通の書簡のコピー資料の提供を受け、さらに白浜市の南方熊楠記念館に展示されている 2 通について、コピーおよびデジタルカメラで撮影し映像資料とした。

上記以外にディキンズの書簡が残っていると思われるロンドン大学（ディキンズが事務局長として勤務）、晩年に日本関係の講義を行ったブリストル大学にも問い合わせを行ったが関連書簡はないことを確認した。ディキンズがその伝記を書いた駐日公使ハリー・パークス宛書簡 6 通がケンブリッジ大学図書館所蔵のパークス文書に含まれていることがわかった他、タイムズ紙に寄稿した 6 通が見つかり、全体で 135 通の資料を整備することができた。

原文の翻刻にあたっては研究協力者（ケンブリッジ大学 P.F.コーニッキ教授）の協力を得ながら進め、併せて施注と翻訳を行った。作業の過程で日付の不明なもの、映像の不鮮明なものについては、現物照合を行うことにより、できるだけ特定に努めた。

またイギリスにおける日本研究に関する資料をロンドン大学東洋アフリカ研究所（SOAS）およびケンブリッジ大学図書館において蒐集した。さらにディキンズが晩年を送り日本研究の仕事を行ったウィルトシャー州シーンドの現地調査を実施し、アーカイヴズにおいてディキンズ関連の記事を蒐集した。

４．研究成果

ディキンズ書簡の翻刻・翻訳の刊行によって今後のディキンズ研究の基礎資料の整備に貢献するとともに、サトウ宛書簡の検証によって、これまで必ずしも明らかでなかったディキンズの足跡や人間像、日本観の変容をたどることができた。また南方熊楠との書簡を検証することによって、これまで必ずしも十分に知られていたとは言えない両者の交流関係がどのようなものであったか、またディキンズが日本文学の翻訳において熊楠からいかに貢献を受けていたかなどを明らかにすることができた。

サトウ宛書簡で残存しているものは 1904 年 5 月 31 日付から、1920 年 12 月 28 日までの 72 通（内 10 通は妻および娘による）である。1901 年にロンドン大学の事務局長を退職し、ウィルトシャー州シーンドに隠居してから 1915 年 8 月 16 日に直腸癌で死去するまでの、11 年あまりの間に書かれている。サトウによるディキンズ宛ての手紙は 1877 年 2 月 12 日付から 1918 年 8 月 18 日付までの合計 165 通が残されていることから、サトウ宛て書簡の前半は失われたものと見られる。

サトウとの書簡のテーマは、日露戦争前後の極東情勢から第一次世界大戦にいたるヨーロッパ情勢、イギリス国内の政治経済問題、ヨーロッパの歴史と文明論、日本関係書籍の書評など多岐にわたっている。またディキンズは無類の読書家であり、言及されている多数の書物は、彼のギリシャ・ローマの古典への強い愛着とヨーロッパの歴史文化への深い関心を示し、当時の典型的なイギリス知識人の価値観を伺わせている。

サトウとディキンズの交流は 60 年代初頭の横浜居留地に住み、それぞれが日本語の学習に熱心に取りくんでいた頃に遡る。日本の僧侶に学んでいた共通の思い出も語られている。日本研究者としてより親密になったのは 70 年代に入り、ディキンズが弁護士として再来日し、その頃に結成された日本アジア協会の評議委員となってからである。植物に専門的な知識をもっていたディキンズがサトウとともに富士登山や八丈島などへの取材旅行にも同行している。

横浜居留地の時代にサトウとディキンズも関わったはずの「アイヌ墳墓盗掘事件」(1865)について論考を行った。駐日公使ハリー・パークスの赴任後間もなく行われた函館視察に彼らは同行している。だが、当時としては貴重な先住民との接触体験についてふたりはほとんど語らず、ディキンズがアイヌ民族に関する論文を発表したのは事件から 20 年あまりを経てからのことである。日英の外交問題に発展しかねないこの事件に対して彼らが発言を控えたのは当然だが、ディキンズの論文を詳細に検討し、事件を再構成してみると、アイヌ人骨がロンドンの自然史博物館に渡った過程においてディキンズの関与があった可能性はかなり濃厚であることがわかった。この事件は、医者でもあったディキンズの側面を伺わせるとともに、より大きな時代の文脈として、19 世紀に入って黄金期を迎えた博物学という知の枠組みのなかで日本が「他者」として眼差され、研究対象として見つめられていたという背景が浮かびあがるのである。

熊楠への書簡はロンドン時代の 1896 年 3 月 24 日から、熊楠が帰国後の 1912 年 7 月 9 日までの合計 51 通が残されている。熊楠からディキンズへの返信も当然あったはずだが、それらはこれまでの調査ではまだ見つかっていない。しかしながら熊楠日記の記載と照合することによって、ディキンズとの関係

のあらましを知ることができる。
　ディキンズは 1866 年に『百人一首』の英訳を出版したのを皮切りに『忠臣蔵』『竹取物語』の翻訳を矢継ぎ早に発表するが、ロンドンで熊楠の知遇を得てからは、彼の協力のもとに『竹取物語』の改訳や『方丈記』を含む代表的な翻訳を行う。旧訳と改訳を比較してみると、翻訳の精度がかなり増していることがわかる。熊楠の帰国後も文通は続き、そのやりとりの大半が『万葉集』などに関するディキンズからの詳細な質問に費やされており、ディキンズの日本文学の翻訳が熊楠の助力なしではなし得なかったことを示している。同時にまた熊楠はディキンズを通して、自身の研究に必要な文献を入手するなど、たがいに学者としての尊敬と友情によって 20 年近い歳月の交流を維持していたことがわかる。
　ディキンズは書簡のなかで日本の 1860 年代を懐かしみ、70 年代を幻想と幻滅の時代と呼び、80 年代には日本に対して次第に距離を置くようになる。近代国家として国力を充実させ西洋列強に加わろうとする日本の変貌ぶりを、驚異と懐疑の入り交じった複雑な思いで見つめている。書簡にみるかぎり、晩年には半生をかけた日本文学の価値にすら懐疑的になり、自らを育てたヨーロッパ文明への回帰を強めていったことがわかる。それでもなお 74 歳を迎えた 1912 年に『飛騨匠物語』の翻訳を刊行するなど、ほぼ半世紀にわたって日本学者であり続けたのである。
　このようなディキンズの軌跡は、やはり明治の日本において、「古い日本の面影」に幻惑されやがて幻滅を味わうことになったラフカディオ・ハーン、あるいはあくまでもヨーロッパ文明の優位性と絶対性を疑うことなく、「他者」としての日本に距離をもって観察し記述しつづけたチェンバレンなどと比較検討する必要があるだろう。西洋における日本がどのように眼差されたのかという、オリエンタリズムの視座において、ジャポニスムに新たな光を宛てていくことが今後の研究課題である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
１．岩上はる子「博物学者としての F.V.ディキンズ―アイヌ墳墓盗掘事件をめぐって―」『英学史研究会』（日本英学史学会）、査読有り、第 41 号、2008、1-12 頁。

２．岩上はる子「F.V.ディキンズ書簡から見えること―日本観の変容」『関西英学史研究』、査読有り、第 5 号、2010、15-25 頁。

〔学会発表〕（計１件）
１．岩上はる子「F.V.ディキンズ書簡から見えること―日露戦争を中心に―」日本英学史学会関西支部、2009 年 8 月 29 日、同志社大学

〔図書〕（計１件）
１．岩上はる子・ピーター・コーニッキ、エディション・シナプス『F.V.ディキンズ書簡英文翻刻・翻訳集～アーネスト・サトウ、南方熊楠（他）宛～』2011 年、373 頁＋xvii

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　岩上　はる子（IWAKAMI HARUKO）
　滋賀大学・教育学部・教授
　研究者番号：40184858

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：